

身体・空間・心・言葉

——梶井基次郎「檸檬」をめぐる——

日 比 嘉 高

上ル下ル

些末な一節にこだわるところからはじめてみたい。

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極を下つて行つた。

「檸檬」⁽¹⁾ 末尾の一文である。最後の「下つて行つた」は「さがっていった」と読む。「くだっていった」ではない。

「檸檬」論は数多いが、この結末はそれほど重要視されていくわけではない。作品の焦点はやはり主人公の「私」が丸善にレモンを置き、立ち去った後そこが爆発することを想像するところにある、「私は活動写真の」云々というくだりは街をさま

よう「私」の一連の行為の連続性を語るだけのものとして考えられたからかもしれない。

もちろん、いくつかの分析はなされており、「自己の精神をたえず極限の位置にさらしながら、必死になって崩壊を防ぎとめようとしている一人の男の夜のように暗い内部」を描いているととらえた日沼倫太郎⁽²⁾や、「近代知識人の殿堂たる丸善を出た〈私〉が歩み去ったのが、大衆文化の代表たる活動写真の看板に彩られた街だったという「檸檬」の結末に、梶井文学が、近代知識人の芥川を超えた時点から出発した事実が、見事に対象化されている」とする神田由美子の論がある⁽³⁾。また、梶井作品の映画的思想力を分析しつつ、この場面を「私」が自分を「活動写真」の主人公として熱心に「想像」している、ということ、現実の空間にあるものによって、象徴的に表現してい

る」とした今泉康弘の論考もある⁽⁴⁾。

だがわたしがまずこだわってみたいのは「さがる」という表現である。

京都の土地に関して多少の知識を持っている者であれば、この街が南北方向の移動について、あがる（北へ行く）、さがる（南へ行く）と呼び習わしていることは知っているだろう。三高時代を京都で過ごした梶井基次郎も、このことを知らなかったはずはない。それゆえ、この箇所「下つて行つた」には、武蔵野書院版の単行本『檸檬』において、「下つて行つた」とわざわざルビが付されている⁽⁵⁾。ほかに「たうとう私は二條の方へ寺町を下り」という箇所もあり、これは「檸檬」の「私」が京都の街を歩く際には自然と呼び出される表現であるようだ。

街を歩く際に「あがる」もしくは「さがる」で進行の向きを確定できる感覚は独特のものだ。わたし自身は別の土地の生まれであるため、この呼び方を京都に住むようになってからはじめて意識するようになった。だからかつて新潮文庫版で目にしたときには、「檸檬」末尾は「さがっていった」と読んでいた。いや、それ以外の読み方がありえるとは考えもしなかったために、正確に言えば読んで、すらいなかつた状態であつたろう。それが京都へ来てしばらくして「檸檬」を読み返し、この箇所の読みが「さがっていった」以外ではありえないことを発

見し、以来わたしの「檸檬」の読みは多少変わった。

一般的な現代の日本の街では、ある通をどちらに向けて歩くかは、その先にあるランドマークもしくは目的地の名前を出し、「○○の方へいく」「○○に向かって歩く」というように表現する。あるいは方角を用い、「南へ向かう」「東へいく」という。これに対し、京都市の中心部では「××（通）をさがる」「××（通）をあがっていく」などという言い方ができる。

××には、烏丸や河原町、千本、東洞院などといった固有の通の名前が入る。この縦（南北）の通に対し、横の通にも三条、蛸薬師、松原などといった名前が付いているため、たとえば「烏丸三条をあがったところ」などという言い方で、おおよその地点の指定が可能となる。慣れれば、非常に便利である。

この慣習がもたらす空間の認識が一般的な街におけるそれと異なるのは、街のマッピングが「点」や「エリア」の集積としてではなく、南北／東西それぞれに固有の名を持った線分が伸び、それが直交しあうことによって創り出される方眼紙のようなマトリクスとして現れることにある。たとえば東京や名古屋といった都市であれば、人々の心的な地図は駅やそれに代わるランドマークを中心にして構成され、それに路線図や道路が重ねられ、エリアが結びついてできる大小様々な円の連鎖―結合体としてイメージされるだろう。地形そのものに特徴のある土

地ならば、これに河川や丘、湾などの形状が加わる。

京都の中心部では、エリアやランドマーク、鉄道やバス路線、自然物による認識はさほど優位ではないように感じられる。むろん四条河原町、祇園といった著名なエリアや御所や京都駅などのランドマーク、また鴨川や吉田山などの自然物も存在はする。が、先に述べたすべてに名の付いた直交する通たちが構成するマトリクスの便利さが、それらの必要性をあまり感じさせないのである。たとえばエリアの例にあげた「四条河原町」は、エリア名としてとおっているが本来的には四条通と河原町通の交差点（付近）を指す言葉である。

「あがる」「さがる」について付け加えれば、これはこの一言だけで方位を示さずとも進行者の進む方向を示し、街のどちらを向いて進んでいくのかを物語る興味深い言葉である。京都の通はそのほとんどが南北、東西にまっすぐに伸びる。それゆえ、「堀川通をあがっていくと」「柳馬場六角をさがると」などというだけで、街のなかを行くその行為者のようすや足どりが具体的に指し示されうるのである。しかもこの言葉は単独で使われることはなく、必ず通の名前と組み合わせ使用される。通はそれぞれに固有名をもつため、その名を呼ぶだけでその通にまつわる一定量の知識や記憶を呼びさます。その通が有名であったり、特別な思い出が存在する場合にはなおさらである。

「京極を下つて行つた」、「私は二條の方へ寺町を下り」、などという一文を読むとき、わたしはその一節に京都の街でかつて生きていた青年の空間的・身体的な記憶とでもいうようなものを感じ取らずにはいられない。この青年にとって、「二條」も「寺町」も「京極」もただの通だったのではあるまい。それは数々の光景と記憶が堆積し、その名だけで風景が立ち上がり、ときに匂いまでもが甦る、生々しいほどに身体に密着した空間だったはずである。

この論考が目的とするのは、大きな用語を使えば、身体と空間と心との取り結ぶ関係を、小説の言葉がどのように捉えたのかを考えることである。「寺町を下り」、「京極を下つて行つた」青年を描く小説の中には、彼の身体と空間が生きた京都の街が織り込まれている。「下」という表現一つをとっても、青年の語りは自身の京都を生きた経験をつまえて語っているし、ルビをもつて顕示するテキストもまたそう読まれることを欲しているとわたしには思われるのである。梶井基次郎の短篇「檸檬」は、こうした身体と空間と心、そして言語の連関を考察するための宝庫である。

身体と空間と心を語る言葉

空間と身体と心、そしてそれを言語化する小説の言葉は、どのように分析が可能だろうか。まず空間を生きる身体のありかたについて、モリス・メルローポンティ『知覚の現象学』（法政大学出版局、一九八二年五月）から補助線を引いておこう。

身体像の理論は、実はひそかに知覚の理論でもあるのである。われわれはわれわれの身体を感じる仕方を、すでに学び直した。つまり、われわれは身体についての、客観的な、距離を隔てた知識の下に、身体がつねにわれわれと共にあり、われわれが身体であるからこそわれわれがもつところの、身体に関するこの別の知識を、再発見したのである。これと同様にわれわれは、身体によって世界に臨んでおり、身体でもって世界を知覚する以上、われわれに現われるがままの世界の経験を、再び目覚めさせなくてはなるまい。しかし、こうして身体ならびに世界との触れ合いを取り戻すことによって、われわれがやがて再発見するもの、それもまたわれわれ自身なのである。（三三七―三三八頁）

われわれが世界に向き合うとき、その対象を客観的な数値に置き換えられるようなそれとして経験しているのではない。メルローポンティは立方体を例に出している。われわれはそれを六枚の正方形の辺同士がとなりあい、六面をなすことによって構成する角柱の一種であることを知っているが、われわれは立方体の知覚を、いまわたしがぐくぐく述べたような仕方で行っているのではない。われわれは、いやわれわれの身体はどこでかつて出会った一つか、あるいはいくつかの立方体の経験をもとに、すでにあの均整の取れた「四角の箱」を知っており、その身体的な経験と記憶を下地として立方体を認識する。身体がすでに知っているのである。「客観的な、距離を隔てた知識の下に、身体がつねにわれわれと共にあ」とはそうした意味である。

そしてこうした沈潜しながらもつねにもにある身体は、われわれが世界を知覚するときにその媒介となる。われわれは「身体によって世界に臨んでおり、身体でもって世界を知覚する」。この二つは切り離すことができない。メルローポンティは、別のところでこうも言っている。「物と世界とは、私の身体の諸部分といっしょに私に与えられている。それも「生れ持った幾何学」のおかげではなく、私の身体そのものの諸部分の間に存する連関にも比すべき、いやむしろこれと同じ、生き

生きとした連関においてなのである。／外的知覚と自己の身体
の知覚とは、同じ一つの作用の二つの面であるから、いっしょ
に変化するのである」(二三五頁、／は原文改行。以下同)。

「生まれ持った幾何学」とは、数値や定義でもって理解しようとする場合における先の立方体の例を考えればよい。われわれはそうした無機質な知識によって、その立方体に臨んでいるのではない。そうではなくメルローポンティは、その立方体はわれわれの身体の諸部分と一緒に与えられ、われわれの手や足や体などが密接に連関し合っているように、その立方体とわれわれの身体とも同様の「生き生きとした連関」においてであると主張する。であるから、外的な知覚と自己の身体の知覚は、「同じ一つの作用の二つの面」であり、であるからその二つは「いっしょに変化する」。

このことをさらに一般化して述べているのが、フリードリッヒ・ボルノウ『人間と空間』(せりか書房、一九七八年三月)の次の箇所である。

人間は空間において受肉しているということ、あるいは人間は空間に住んでいるということは、人間がそこである状況のなかにいるということ以上のことを意味しているのである。それは、人間がある媒体のなかにいて、この媒体の

なかで移動することができるということだけではなく、人間自身がこの媒体の部分であるということ、すなわち境界によってこの媒体の他の部分から分離されてはいるが、なおその境界をこえてこの媒体と結びついており、この媒体によって担われさえられているということの意味しているのである。(二八六頁)

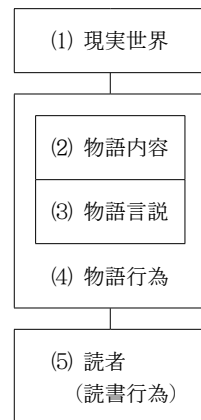
人は「空間のなかへ埋めこまれている」(同頁)というボルノウの主張は、世界と身体の生き生きとした連関を説いたメルローポンティの言葉と同じ合うものである。ボルノウは、ただしメルローポンティの身体の考察よりもより広汎に、「人間」と「空間」の関係一般を考察しようとしていた。それゆえ、彼が「人間」というときには身体の問題だけではなく、心の問題も含まれている。その考察は難解ではない。たとえば、ある部屋のもつ雰囲気によって人はたやすく気分を左右され、快適にもなり不快にもなる。また時々気分に応じて、ある同じ部屋が、明るさに満ちた空間になることもあれば、息苦しくいたたまれない空間になることもある。われわれが空間とが取り結ぶ相互的な関係を想起すれば、ボルノウのいうことはおのずと理解できる。

梶井基次郎の「檸檬」は、こうした響き合う心と身体と空間

の連関を緻密に描き出す。読者は登場人物である青年を媒介にしつつ、それを読み取り、感受していくわけだが、その具体的なあり方の考察をはじめの前に、もう一つだけ考えておかねばならないことがある。文学テキストは言語によって構築されている、という点である。

メルロ・ポンティの議論にせよ、ボルノウの議論にせよ、それらは現実の空間に生きる、現実の人々の経験を対象にして考察している。これに対し、文学研究が向かうのは、作品を構成する言葉である。世界を媒介する身体、それに連動して揺れ動く心を、言葉のみによって構築するのが小説という言語芸術である。

田口律男は『都市テキスト論序説』（松籟社、二〇〇六年二月）において、都市を表象するテキストの分析を行うに際し、「Ⅰ物語内容の身体／都市／政治力学の水準と、Ⅱ物語言説の表象／テキスト／読書行為の水準とをどう交差接合させるか」（三三頁）という課題が存在することを指摘している。これは重要な指摘である（ただし、読書行為の水準はまた別に置くべきだとわたしは考える）。この着眼点をわたしなりに組み替えてつつ展開すれば、次の(1)～(5)のそれぞれの水準で、心と身体と世界の絡み合いは考察できると思われる。



(2)から(4)がテキストの水準である。(1)はテキストと対応する現実世界（作者のレベルも含む）の水準、そして(5)はテキストと向き合う読者の水準である。

(1)では作者の生きた時代、場所において、あるいは作品が舞台としていた時代、場所において、空間と身体がどのように構成されているか。(2)は作品の物語内容において登場人物の身体や物語世界の空間がどのようなものとして描かれているか。(3)は物語内容を描き出す言葉がどのように用いられているか。(4)はその物語を語る語り手が、どのように世界や身体をとらえ、それをいかに語りに織り込んでいるか。(5)はテキストとして差し出されるその物語を、読者が自身の世界認識や身体感覚と交差させながら、どのようなものとして立ち上げていくか、である。

梶井基次郎の「檸檬」に即してこれらの問題系を発展的に展開し直せば、たとえば次のような課題群が浮かび上がるだろう。

う。大正末の京都の街とはどのような空間であり、その中で人々の身体はいかにそこに住まったか。テキスト内で行為する「私」の心と身体は、作品中の街や場所と、いかなる相互的關係をもっているか。またその関係は、現実の京都という街とそこに生きた梶井基次郎やその友人の三高生たちとの関係と、いかなる関係にあるのか。そして「私」の心と身体が京都の街と連関しあうありようは、どのような言葉で描き出されているのか。語り手である「私」は、登場人物「私」と周囲の空間との関係を、どのようなものとして言葉に置き換えていつているだろうか。「私」の語りの現在時における心と身体は、その語りによどのような影を投げているだろうか。そして最後に、われわれ読者は、語り手「私」の紡ぎ出す言葉を媒介にして、京都の街、「私」の行為する身体、そして心を、どのようなものとして受け取り、また構築していくのだろうか。

以上の問いは、今回の小論ですべてに個別に答えられるべきものとして提示されているわけではなく、立てうる可能な課題として、この小考の構想を押し広げるべく示されている。では以下、「檸檬」というテキストで展開される空間・身体・心のかたちのいくつかを取り上げ、具体的に検討していくこととしよう。

街の上で

「檸檬」のテキストに特徴的なのは、空間内で振る舞う身体を把握するさいに用いられる「街の上」という言葉である。

それからの私は何処へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を圧へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んで来たと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。(傍線引用者、以下同)

——それをそのままにしておいて私は、何喰わぬ顔をして外へ出る。——

私は変にくすぐつたい気持がした。「出て行かうかなあ。さうだ出て行かう」そして私はすたすた出て行つた。変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑^{ほほえ}ませた。

内田照子は、この「私は街の上で」と「街の上の私」に注目し、「これは束の間の幸福に「微笑んでさえている「私」とは別に、もう一人の「私」という目が遠くから、まるで「街の上」にいる一個の人間という物体を眺めることによって可能になった表現である。「私」はこの時点で分離してしまっている⁽⁶⁾」と

指摘した。「私」の分離を指摘し、一方が遠くから他方を眺める視線が存在するというわけである。語る「私」・見る「私」と語られる「私」の関係のありかたを考察する手がかりとなる、重要な指摘だろう。

だが、考察の対象をテキスト内の身体と空間の描かれ方にむけたとき、問題となるのは「分離」ではなく、「街の上」という表現のあり方にあるように思われる。

人が街に含まれて位置しているとき、標準的な日本語の言い回しでは、「街の中に」という。街の「中」と言ったときに表現している状態は、その身体を街が取り囲んでおり、包んでおり、身体はその中に立体的に含み込まれているという状態である。この言葉遣いは通常我々は意識しないほどに自明で透明だが、空間の認識としてそれを解きほぐせば、われわれは街を三次元の、身体を取り巻く大きな容器のようなものとして認知していることになる。空間と身体はここでは容器と内容物の関係にたとえられるだろう。

これに対し、では街の「上」という表現は、どのような状態を示しているだろうか。すぐさま気づくのは、街はそこでは身体を包むものとしては認識されていないということである。街は、立体的に取り囲むのではなく、身体の下に、平面的に広がるものとして認知されている。空間と身体の関係は平面とそ

の上にあるモノの関係といえるだろう。

ここで気づくのは、こうした平面とモノとの関係は、別の場面でも繰り返し変奏されていたということである。

以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がなくなつた。蓄音器を聴かせて貰ひにわざわざ出かけて行つても、最初の二三小節で不意に立ち上つてしまひたくなる。何かが私を居堪らずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けてゐた。

ある朝——其頃私は甲の友達から乙の友達へといふ風に友達の下宿を転々として暮してゐたのだが——友達が学校へ出てしまつたあとの空虚な空気のなかにぼつねんと一人取残された。私はまた其処から彷徨ひ出なければならなかつた。何かが私を追ひたてる。そして街から街へ先に云つたやうな裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち留つたり、乾物屋の乾蝦や棒鱈や湯葉を眺めたり、たうとう私は二条の方へ寺町を下り、其処の果物屋で足を留めた。

私はもう往来を軽やかな興奮に弾んで、一種誇りかな氣持さへ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のこ

などと思ひ浮ては歩いてゐた。〔…〕

何処をどう歩いたのだらう、私が最後に立つたのは丸善の前だった。

居堪らず、立ち上がってしまいたくなり、転々とし、追い立てられ、浮浪し、彷徨う。あるいは軽やかな興奮に弾み、詩人のように街を闊歩する。この落ち着きなく移動する身体は、街に取り囲まれている身体よりも、やはり街という平面の「上」をふらふらと放浪する身体のありかたとして考えた方がふさわしい。

そしてテキストは平面上を浮動する身体として青年の体を描き出しながら、そこに心の変化を連動させて語っている。身体と心と空間は、「何かが私を追ひたてる」、「往來を軽やかな興奮に弾んで、一種誇りかな気持さへ感じながら、美的装束をして街を闊歩した詩人のことなど思ひ浮ては歩いてゐた」というように、連関のもとにおかれて描き出される。同じ平面の上のモノであっても、それが憂鬱な心とともにあれば、焦燥感の中で追われるように浮浪するありさまとなり、晴れやかな気持ちと共にあれば軽やかに弾み、闊歩するありさまとなる。

テキストは、登場人物の身体を媒介にしながら空間を心理化／感覚化し、また心理／感覚を空間化する。「檸檬」におい

て、空間は青年の身体を介して、ときに不安や焦燥で居堪れない彼を追うものとして描き出され、またときに軽やかな心に弾む彼の歩みを受け止めるものとなる。

身体——潜在と顕在の劇

「檸檬」の「私」の振る舞いや心理を追いかけていて気づくのは、それが非常に起伏に富んでいるということである。目まぐるしく猫の目のように切り替わる心象の上昇／下降の運動は、「檸檬」というテキストを読む醍醐味であるが、このことは翻って、先の身体と心と空間の問題を再考するときに、一つのアイデアをもたらしてくれるように思う。

メルローポンティとボルノウを導き手にしながら考察してきた本論考における「身体」は、ここまで一つの身体を暗黙のうちに前提に進めていた。統合的で、亀裂のない、その変調や違和、分裂に言及する必要のない、健やかな身体。不具合なく統御され、欠落なく均整の取れた一つの身体。だが、身体とはそもそもそのようなものだろうか。

市川浩の『《身》の構造——身体論を超えて——』（講談社学芸文庫、一九九三年四月）は次のようにいう。「われわれの身の統合というのは、今現実化している統合だけではなく、さま

ざまの統合可能性があるわけです。そのなかから一つの統合が選ばれてくる。一つの現実的統合の背後にも、いわば無数の可能的・潜在的な統合がある。われわれの身体はこうしたさまざまな統合可能性を含んでいるわけですが、こうした潜在的な統合可能性を含めた身体を私は錯綜体と呼んでいます」（一九六頁）。

この概念を援用するならば、「檸檬」は青年の身体のうち、いくつかの「可能的あるいは潜在的な統合」がめぐるしく反転し、交代して出現するようすを記述するテキストだといえるかもしれない。そしてむろん、それらの可能的・潜在的な身体（からだ）の統合は、それが埋め込まれる空間と連動しながら描かれる。いくつか検討してみよう。

錯覚の街と病う身体

まずは錯覚と想像の中の身体／空間である。

何故だか其頃私は見すばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えてゐる。風景にしても壊れかかった街だとか、その街にしても他所所しい表通よりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあつたりがらくたが転し

てあつたりむさくるしい部屋が覗いてあたりする裏通が好きであつた。〔…〕

時どき私はそんな路を歩きながら、不図、其処が京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのやうな市へ今自分が来てゐるのだ——といふ錯覚を起さうと努める。私は、出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な蒲団。匂ひのいい蚊帳と糊のよく利いた浴衣。其処で一月ほど何も思はず横になりたい。希はくは此処が何時の間にかその市になつてゐるのだつたら。——錯覚がやうやく成功しはじめると私はそれからそれへ想像の絵具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかつた街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失ふのを楽しんだ。

ここでは映画の表現手法に起源がある「二重写し」という言葉（ことば）を鍵としながら（前掲、今泉論を参照）、現実の空間と身体とが、想像の中の空間と身体とに重ね合わせて描き出されている。

引用部では、いくつかの不可思議な重ね合わせが行われている。京都の裏通を歩く身体は、旅先の旅館で横になる身体と想

像的に重ね合わされる。同じように、京都の裏通は、仙台や長崎などの遠い「市」と置き換えられようとする。ここで不思議なのは、歩く身体が横たわる身体と重ねられ、みずばらしくも美しい裏通が、がらんとして清浄な旅館と蒲団に重ねられているということである。「私」自身の解説するところによれば、それは「出来ることなら京都から逃出して誰一人知らないやうな市へ行つてしまひたかつた」からであり、「現実の私自身を見失ふのを樂し」みたかつたからということになるのだろう。

だが、清浄な蒲団で、「安静」に「一月ほど何も思はず横になりたい」という記述が暗示するのは、前景化して語られることはないが、放浪する彼とつねに共にある、彼の病う身体である。蝕まれた生活がもたらすものか、過度の飲酒によるものか、肺炎カタルによるものか、神経衰弱によるものかは判断できないものの、いずれにせよ彼の身体は「一月」の「安静」を必要とするほどに病んでいる。彼一流の審美感覚によって飾られた心象の向こうには、潜在する病んだ身体があったといえるだろう。

大正の京都、生きられた京都

ここで考えようとするのは、先の図でいえば(1)の「現実世

界」にあたる。この水準は、定義上テキスト内には描かれていないレベルである。

言葉は、現実世界の事物と全き対応をしているわけではない。小説の言語は虚構であることを許された言語であるから、それはなおさらである。梶井基次郎の小説は、かなりの程度の「私小説性」を有しており、作者梶井基次郎が経験し、思考したものが登場人物の造形やストーリーに利用されている。

たとえば、「檸檬」は梶井の第三高等学校時代、一九二二年ごろの京都を舞台にしていると考えられ、梶井自身にレモンを買った経験があり、寺町や京極を遊び歩いた経験がある^(?)。だがそのことは、必ずしも作品の言葉と梶井の経験と大正末期の京都がびつたりと重なるということを意味しない。問題は、それら相互の距離である。

ボルノウは「等質性」を決定的な性質とする「数学的空間」に対し、「空間にたいする人間の関係」を問う「体験されている空間」(ボルノウ前掲書、一六頁)というアイデアを提出する。「この空間が、その中で生活している人間と相互関係にあるものとして人間にどのくらい強くむすびついているかは、この空間が異なる人間にたいして異なる空間であるということだけではなく、個人にとっても、その人のその時その時の構えや気分の状態によって変化することからおしはかることが

できる。人間の「なかの」変化はいずれも、その人間の「生きられてゐる空間」の変化を条件づける」（一九頁）。われわれの目の前には事物が場所を占め、その位置や距離を数値に置き換えられる物理的な空間が広がるが、われわれ自身の生きて経験する空間は、必ずしもその物理的な空間と一致するわけではない。距離に換算すれば同一の道のりでも、通い慣れた道であれば近く感じ、始めて歩く道であれば遠く感じる。萩原朔太郎の『猫町』〔『セルバン』一九三五年八月〕が劇的に描いたように、同じ街であっても、なんらかの気分や錯覚のもとに、そこがあたかも別の街であるかのように経験することがある。そうしたわれわれの知覚や身体が経験する、物理空間とは別のレベルの空間を、ここでは「生きられた空間」と呼ぼう。

小説は、現実の物理空間と、「生きられた空間」との双方を、テキストの中に織り込む。

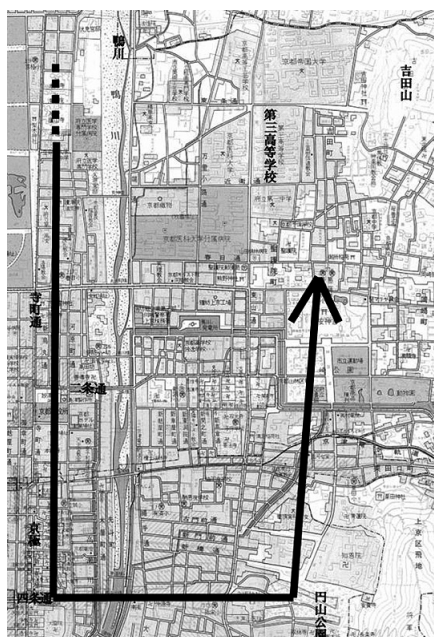
小説「檸檬」に含まれる地名や通、商店などの名称は、現実のある地理的一地点、歴史的一時点に存在した京都を指し示している。それは、テキストが名指さないうちに前提とする時代相や、地理的配置を準備する。「檸檬」に関しても、この種の現実の空間や事物を起点に読みかえる試みが存在する。本田孔明は京都市議会が一九二二年に決定した「京都市計画概要」を引きながら、この時期の京都における都市の拡大が、「交通網

の整備による〈表通り〉の誕生でもあった」ことを指摘している⁽⁸⁾。中河督裕も、丸善、寺町、^{かき}鑑屋、新京極などの歴史的状況を、『京都日出新聞』の調査をもとに明らかにしている⁽⁹⁾。

こうした先行する論考は、「檸檬」のテキストの背後、広がっていた大正末の現実の京都のありさまをあぶり出してくれる。その街は市街地の再整備にともなう道路の拡張や市電の路線変更に揺れており、青年が歩いた寺町はまさにその焦点の一つとなっていた。またそこは、繁華街とはいえ、「夜ともなればまだ連なる街灯の明かりもなく、雨ともなれば足元は泥濘に変わる」（前掲、中河論）、街灯以前、舗装以前の古い町筋であった。

こうした現実の物理空間の上に、梶井の生きた京都はかつて営まれ、テキストはその「生きられた梶井の京都」の手触りを今に伝えている。梶井の京都は、われわれには不可知である。読者は、海野弘が行ったように、「檸檬」の記述と地図や回想といった当時を語る資料をもとに、そこに想像と推定によってにじりよることができるだけである⁽¹⁰⁾。

ただ、いくらかの補助線は引くことができる。作者梶井基次郎や同時代の友人の三高生たちの生きた京都にまつわる回想が残されている。大宅壮一「三高のころ」は次のように振り返る⁽¹¹⁾。



参考図版1 学生たち散歩ルート模式図

とにかく京都の学生はよく散歩をした。そのコースも決まっていた電車があっても乗らず、河原町筋から京極へ出て、祇園、円山公園を通って、また元の吉田山へ帰って来る。全部歩けば二里ぐらいの道を、毎日々々、時にはその逆のコースをとったりしていた。

大宅の回想は、当時の学生たちのよくある散歩コースを語っている。それをもとに推定すれば、彼らは三高や京都帝大のある吉田山、北白川、百万遍のあたりを出発し、出町か荒神橋で鴨川をわたり、河原町通を下がっていく。それから京極へ入

り、四条通を東進して鴨川を再度渡り、祇園を抜け円山公園を通り、知恩院、青蓮院、岡崎などを抜けて北上、もとの下宿へともどる、〈回遊コース〉をもっていたことになる。

梶井自身が頻繁に四条や京極界限に出かけていたことはすでに触れたが、おそらくはこのとき彼も同じような〈回遊〉を行っていたことだろう。草稿「雪の日」⁽¹³⁾には「それはなにか涙で心を洗ひ淨めたい様な、そしてそんなことが出来そうな気持ちであった。それに触れると、彼の心は敏感に身構へした。／黒谷、鹿ヶ谷、法然院、若王子、南禅寺。その道筋が直ぐ頭へ来た」という一節がある。出来事に触発され、動き出した心がいつも歩む散歩の道筋とそこに展開する風景を心のうちに呼び起こす。黒谷、鹿ヶ谷、法然院、若王子、南禅寺は、いずれも東山の山麓にそって流れる琵琶湖疏水の分線（今日「哲学の道」として知られる）の近辺にあり、先の〈回遊コース〉に重ねていえば、一周分ほど外（東）に位置する。梶井基次郎の身体には、こうした日々の〈回遊〉の経験と記憶が蓄積していたと考えてよい。

もはや言うまでもないが、「檸檬」の「私」のたどる道筋も、大宅の言ったような学生たちのお決まりの散歩コースをほとんど忠実に言っているほどになぞっていた。友人の下宿をさまよい出た青年は、鴨川をわたり河原町と並行する寺町通をた

どって南下し、三条麩屋町西入ルで丸善に立ち寄り、そこから京極へと下がっていくのである。

青年のたどった道筋が、〈回遊コース〉の一部であることは間違いない。だが、テキストの語り手は、そうした慣習的ともいってよいだろう主人公の振る舞いを、あえて意識の空白を織り交ぜながら語っている。ここに、小説「檸檬」の身体と心と空間を語る言葉の、もう一つの特徴が存する。

——結局私はそれをつだけ買ふことにした。それから私は何処へどう歩いたのだらう。私は長い間街を歩いてゐた。始終私の心を庄へつけてゐた不吉な塊がそれを握つた瞬間からいくらか弛んで来たと見えて、私は街の上で非常に幸福であつた。

何処をどう歩いたのだらう。私が最後に立つたのは丸善の前だつた。

この語りをそのまま無根拠に信じるわけにはいかないが、仮にそうだったとした場合、青年の身体は、「私は何処へどう歩いた」かわからないうちに見知った丸善の前に立つ。それは知らず知らずのうちに、体に染みこんだルートを、あるいはなじ

み深いエリアを、無意識のうちにさまよい歩いたということの意味するだろう。住まれた街のなじみ深さと、そこを生きる身体のなじみ深いがゆえに半ば自動化した振る舞いを、その語られざる間隙のうちに見ることができる。

身体の模倣と抵抗

ここまで、一つの身体という発想ではとらえきれない、「私」の身体の中に潜在し、共存する、可能的な身体についてみてきた。市川浩の〈錯綜体〉の概念は、たしかに「檸檬」が描いた心と体と空間のありさまを考える有効な補助線になりえたようである。

だが、レモンを手にし、自らを悪漢に擬して街へと消えていく青年の身振りは、そうした身体の内部に浮かんでは消える潜在と顕在の劇よりも、より能動的に自らの身体を切り替えていくあり方を示しているようにも思われる。そして、「檸檬」というテキストの焦点が、そうした彼の能動性の発揮におかれているのだとしたら、その出来事を回顧的に振り返る語り手の企図もそこを起点に再考しうるかもしれない。

「私」はレモンを買い、軽やかな気持ちで街を歩き、丸善の前に立つ。そこに足を踏み入れると、しかしながらまた「憂鬱

が立て^{たて}置^きて来る」。引き出した画本も元に戻すことができない。「私」は本の山の上にレモンを置くことを思いつく。

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰つて来た。私は手当たり次第に積みあげ、また慌しく潰^{つぶ}し、また慌しく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加へたり、取り去つたりした。奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなつたり青くなつたりした。

やつとそれは出来上つた。そして軽く跳^はりあがる心を制しながら、その城壁の頂きに恐る恐る檸檬を据^すえつけた。そしてそれは上出来だつた。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴^さえかへつてゐた。私は埃^{ちり}っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張してゐるやうな気がした。

私は、さらにそれをそのままに出て行くことを思いつき、丸善を後にする。

変にくすぐつたい気持が街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢

が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだたらどんなに面白いだらう。

私はこの想像を熱心に追求した。「さうしたらあの気詰りな丸善も粉葉みちんだらう」

一連のシーンを身体と心と空間の織りなす劇として読もう。

「気詰りな丸善」の空間の中に、青年は「奇怪な幻想の城」という彼自身の手によるもう一つの空間を創りあげる。丸善の空間をはじめ、「其頃」の「私」の心は「不吉な塊」が「始終庄へつけ」られており、取り囲む空間はそのすべてが「居堪らずさせ」られるものであったことを想起しよう。彼がレモンを買い、そのレモンを幻想の城の上に置くことは、そうした庄迫する空間に対する抵抗としてある。

ここで重要なのは、彼がその空間およびそれに庄迫される身体に抵抗するに際し、「美的装束をして街を闊歩した詩人」や「黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けて来た奇怪な悪漢」というように、別の身体のイメージを借り受けながらそれを行っているということである。

他者の身体のイメージを借り受けⅡ引用し、反復することによって自らの身体と心に抵抗の契機を創りあげていくこの彼の行為に注目しよう。彼が行ったのは、「不吉な塊」に庄迫され

「居堪らずさせ」られていた身体を、レモンという触媒をテコにしながら、別の身体の振る舞いを想像的になぞり置換しようとした試みに他ならない。その試みは身体と連動する空間の置き換えにもむろん連動する。気詰まりな空間の中に、想像力によって自らに親和的な空間Ⅱ城を準備し、レモンという触媒を添えて配置する。彼の想像する「大爆発」とは、こうして対峙する二つの空間と二つの身体の拮抗の暴力的な無化の喩えに他ならない。

末尾の一文にある、「活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩つてゐる京極」という描写は、これまでにテキスト内に出たどの街の描写とも異なる。さびれた裏通でもなく、想像のなかの遠い市でもなく、賑やかだが澄んだ感じの寺町でもない。彩る、という表現が示すように、街はその表面を外部的な色彩により上塗りされている。文字どおりにとればそれは看板画が数多くかかっているようすを指しているが、「奇体」と「彩」という表現に注目すれば、あきらかにこれは直前の場面ででくする、丸善の中に「奇怪な悪漢」としての彼が配置した「奇怪な幻想的な城」、およびそれを構成する「本の色彩」の「ゴチャゴチャ」と響きあう。すなわち、爆発によって飛散した奇怪な城の色彩と、末尾に登場する空間の彩りとが連関するようなテクストの運びとなっているのである。とすれば彼の下る京極と

は、彼自身が能動的に仕掛けた空間と身体の置換を引き受け、その想像的かつ暴力的な抵抗の延長上に幻出した、彼による／彼のための空間に他ならない。

もちろん、それは想像力による一瞬の爆発にすぎず、閃光のあとすぐに消え去るような抵抗には違いない。それでもなお、この出来事を通じて、「私」は彼の病う身体と蝕まれる心が、きっかけさえつかめばたとえ一時であっても晴らす可能性はある可変的なものだということを知ったのではないだろうか。だからこそ、この事件のあった時代を「あの頃」として振り返る語り手は、今この檸檬の話語るものであり、その話を語るのに際し、めまぐるしいまでに身体と空間と心とを錯綜させて語ったのであろう。

読者の身体、読者の街

空間にまつわる名は、記憶の媒介のトリガーになる。それはたとえば梶井の京都をわれわれ読者が今日に引き継ぐ媒体となり、われわれ読者の京都を「檸檬」というテキストに接続させる経由点となる。

鑑屋は、マンションになった。丸善は少し前までは河原町四条上ル東側にあり、その時代にも現代の悪漢たちによりレモン



参考図版 2 大正末期の新京極風景

の爆弾をしばしば仕掛けられていたそうだが、そこもいまは大規模なカラオケ店となった。三条麴屋町の丸善跡はその後銀行が建ち、さらにいまマンションへと変わり、新京極の映画館も次々と姿を消している。八百卯は、まだある。

二〇〇四年からこの街に住むわたしは、ノスタルジーを語るつもりはないし、その資格もないだろう。だが、彼の言い草ではないが、それにしても心という奴は何という不思議な奴だろう。われわれ読者の心と身体と空間が、テキストという回路を

通じて、「生きられた梶井基次郎の京都」と接続できるということは、ほんとうに不思議なことというほかないではないか。

むろん、それは錯覚だ。だが、錯覚こそがここでは驚異であり歎びではないのか。八百卯を訪ね、古い丸善や都市計画について調べ、京都の街の上を歩きまわるとき、わたしは「二條の方へ寺町を下^{さか}」っていく青年の横顔を見、奇怪な土産物屋が街を彩っている京極を下って行く青年の後ろ姿を見るような気がする。あるいは、ひとり机に座りゆっくりとページめくる、その言葉と言葉のあわいに、ふと自分自身を埃っぽい丸善の中に発見する気がする。

心と身体と空間が、言葉を通じて幾重にも積層する。その堆積が、啓示のようにひらめく瞬間である。

注

- (1) 梶井基次郎「檸檬」は『青空』創刊号（一九二五年一月）に掲載、のち単行本『檸檬』（武蔵野書院、一九三一年五月）に収録された。「檸檬」本文の引用は『梶井基次郎全集』第一巻（筑摩書房、一九九九年一月）による。
- (2) 日沼倫太郎「梶井基次郎」『現代作家論』南北社、一九六六年六月）、引用は鈴木貞美編『梶井基次郎「檸檬」作品論集』（クレス出版、二〇〇二年九月）による。
- (3) 神田由美子「梶井基次郎「檸檬」の丸善」『梶井基次郎表

現する魂』新潮社、一九九六年三月）、引用は前掲『梶井基次郎『檸檬』作品論集』、三三〇頁。なお、神田同論は、同じ箇所について次のような指摘も行っている。「この時〈私〉は、芸術と実人生を対照させ、芸術を実人生の上位に置く近代作家の古い精神構造を超克し、芸術と実人生を合体させ、さらにそれを破壊した後に生まれるまったく新しい芸術と人生の可能性を見出して、「活動写真の看板画が奇体な趣きで街を彩っている」新時代の空間への一歩を踏みだした」（三二九頁）。

(4) 今泉康弘「時計じかけの檸檬——梶井基次郎と映画的理想力——」（『法政大学大学院紀要』二〇〇二年三月）。

(5) 初出の『青空』掲載形ではルビは付されていない。

(6) 内田照子『檸檬』（『評伝評論 梶井基次郎』牧野出版、一九九三年六月）、引用は前掲『梶井基次郎『檸檬』作品論集』、三〇一頁。

(7) 年次の推定に関しては、同年のものと推定されるノートに、小説『檸檬』の原型の一つとなった詩「秘やかな楽しみ」が書かれている事実がある。鈴木貞美『梶井基次郎の世界』（作品社、二〇〇一年一月）、二四一頁を参照。京都時代の梶井については、中谷孝雄「『檸檬』の思ひ出」をはじめとする『梶井基次郎全集』別巻（筑摩書房、二〇〇〇年九月）所収の回想、および鈴木貞美編著『年表作家読本 梶井基次郎』（河出書房新社、一九九五年一〇月）、柏倉康夫『梶井基次郎の青春檸檬』の時代（丸善、一九九五年一月）などを参照。

(8) 本田孔明「幻の街——梶井基次郎『檸檬』論——」（『文学』一九九四年秋号）。

(9) 中河督裕「梶井基次郎『檸檬』に見る大正末・モダン京都——『京都日出新聞』の紙面から——」（竹村民郎・鈴木貞美

編『関西モダニズム再考』思文閣出版、二〇〇八年一月）。鑑屋とは「檸檬」の八百屋の舞台とされる八百卯の向かいにあった菓子司・喫茶店である。新京極の映画館街については加藤幹郎『映画館と観客の文化史』（中公新書、二〇〇六年七月）。

(10) 海野弘「レモンの街——京都モダン・シティ紀行——」（『旅』一九八八年一〇月）、前掲『梶井基次郎『檸檬』作品論集』所収。
(11) 大宅壮一「三高のころ」（昭和四十一年版筑摩書房全集・月報②）、引用は前掲『梶井基次郎全集』、三七〇頁。

(12) たとえば中谷孝雄「『檸檬』の思ひ出」には「その頃、僕たちは殆んど毎日のやうに連れだつてゐたので、何時もゆく鑑屋の給仕女たちからは「邯鄲の兄弟」などと呼ばれてゐた。邯鄲といふのは鑑屋にある菓子の名で、坊主枕のやうな形をした、大きさは太い拇指位の餅菓子である」などとあり、飯島正「梶井君の思ひ出」にも「ある晩、四条の大橋を、梶井君と散歩してゐた時だ」とある。引用はともに前掲『梶井基次郎全集』別巻による。

(13) 一九二五年ごろ、引用は『梶井基次郎全集』二巻（筑摩書房、一九九九年一月）、八二頁。

(14) 旧丸善京都店員の方の筆者への直話による。

参考図版の出典

参考図版1 『京都の歴史8 古都の近代』（学芸書林、一九七五年三月）附属の地図（大正四年）を利用した。

参考図版2 『写真で見る京都100年』（京都新聞社、一九八四年一月）所収。

（ヒビ ヨシタカ 嘱託研究員）